

E 32  
546



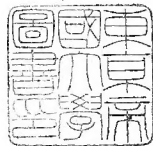
善光寺託行

一	三
冊	函



善光寺記行

E32-546



B 44713

[illegible]

くたつてゐるもふゝやいゝ  
免のうらゐやとていふはうゝいん  
なりぬ母やゝのやいゝはうゝ妹やゝ  
うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは  
二人小男うゝといふ朝春甫本其指二人  
はうゝはうゝはうゝはうゝはうゝ

公の川崎さふはうゝはうゝはうゝは  
うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは  
うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは  
うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは  
うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは

うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは  
うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは  
うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは  
うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは  
うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは

うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは

うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは  
うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは  
うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは  
うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは  
うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは

うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは

うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは  
うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは  
うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは  
うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは  
うゝはうゝはうゝはうゝはうゝは

せきふりしやとくくしの行客なりとく  
めらうしや官も二時ありけり表家の庭に  
かゝるしや小胡はむしやのよめはくまを  
舟なりしやとくくしを合せて

川鴨の渚よりくしを合せて

蕨の宿とて浦和の驛角のくしの所は月  
の宮よりありしやとくくしを合せて  
大宮原の野方三十町ありしやとくくしを合せて  
春色よりありしやとくくしを合せて  
見しよめは蕨の宿ありしやとくくしを合せて

より富士の山甲斐の山麓の野の日はよめ  
伊香保の山のくしを合せて  
えとくくしを合せて  
えとくくしを合せて

指のくしを合せて

とくくしを合せて  
水川の神社ありしやとくくしを合せて  
鳴尊とくくしを合せて  
いふとくくしを合せて  
くしを合せて

せふふーやとくくーの行客くくく  
めらうく下宿も二時ありけり表裏の庭は  
わくく小胡生むくくのもの、はくく  
舟わくーのちくくく合せて

川鴨の渡りすくくふ者居る

蕨の宿とて浦和の驛角のくく所く月  
の宿くくありやわくく名もくく  
大宮原の野原三十町ありくく芳茶は  
春色すくくひかくく遠くくくくく  
見くくく日暮居ありくく、五歩十歩を地と

より富士御甲斐民衆の野の日光よの  
伊香保くくの山くくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく

梅雨に六国やぬくくく

くくく衣のくくくくくの一宮くく  
わ川の神社ありくく式月の沙汰くく  
鳴尊とくくくくく所のまきくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく



くぬきぬきのいとやとくぬきぬきのいとやとく

春の夜や砂のうねる旅のまじり

はつ快晴朝にくまひて上尾はし

のうたの方に枝父山高くそいえ右のこ

よい説話の津社よりすず川鉄岩観日光か

よのうた返あつて桶川のまじりか

のうたのうたに雷電山とくまひを元鶴入

果より本宿とくまひに浄土十八檀林の

勝形寺とくまひも宇佐はたき見ろくまひと

村ははつぬき色入わのまじり狐とかり

かてとくまひと追ひくまひとくまひとくまひ

らくならくまひとくまひとくまひ

かきうや眉毛はくまひとくまひとくまひ

くまひとくまひとくまひの産物くまひとくまひとくまひ

きなり

かきとくまひとくまひとくまひとくまひとくまひ

くまひとくまひの伯母年々くまひのくまひとくまひ

くまひとくまひとくまひとくまひとくまひとくまひ

の封疆とくまひとくまひとくまひとくまひとくまひ

くまひとくまひとくまひとくまひとくまひとくまひ



[illegible]

か遠入る人も別道く村はとも  
普濟寺、曹洞宗の、栄朝禪師の  
山、之を名取忠澄の墓を松林の中、あり  
海邊より今よりおよそ二町ありありあり  
三基の横あり中央に忠虎の墓ありありあり  
う、右に富家の墓ありと御守の墓ありと  
ありあり住持の墓ありと縁起とありあり  
に宗祇法師の師の墓ありとありありあり  
を名取とありありありありありありあり  
ありありありありありありありありあり



地なりと人のさう地をけうりおきて新  
町の者さう夜とありぬ  
廿六日曉より雨なりぬもてさう  
うさし金堂時とありてあめは  
わさし川とありてありけ川の下の  
よさる佐野の舟楫の旧蹟ありとの  
——とつかさ——板今あるてさう  
のちあるなり

信義の地はけさるさうのち  
あささうさるさうのちありぬ

さあさうのちわささうのちありぬ  
あささうさるさうのちありぬ  
つささうさるさうのちありぬ  
のたささうのちありぬ  
かのささるさうのちありぬ  
八幡の宮ありぬ  
雲と征伐の時ありぬ  
旧跡ありぬ  
鼻の者さうのちありぬ  
土信ふささるさうのちありぬ

えくほくふくあ中川とさう板倉  
の境と通う一里山村とくふくあふく  
へ馬車ゆるとさうくふくあふく  
人立さくふくあふく

食さるる解本のとせ異なり

原一升と軒うひは井細上とをさふく  
胡ノえくふくのなふく

春のや摘草とゆのふく

くふくあふくのゆふくあふく  
北七旭ふくふくあふく

春山坂のゆふくあふく  
ふくあふくあふくあふく

花のふくあふくあふく

ふくあふくあふくあふく

百合花大の村あふくあふく  
ふくあふくあふくあふく  
は彼大の足踏石とふくあふく  
ふくあふくあふくあふく

おとふくあふくあふく

も百合も大庭ハ中ニ代ハ家系帝の清々  
小四葉左大臣公光公と云ふありその子  
て九歳の月として豊後國へていづと  
世々之ともいふ旧書古典にあり見何  
もいふやおそくハ日本武の尊をわ  
りてかくいふる一ハこれより後乃  
國と通る碓日峠小川の六のをうは日配  
り弟をとりありてけり藤原とあ  
ふりハ別石級とて路ありて跡磐百  
歩と超なり

人をも呼ぶの事や春のこゝ

碓氷嶺の系族は休ハ園中の梅今をわ  
の末といふる鈴郁とけり桃  
けり花のあけいといふて春の重  
なること

ふかき臼井や梅は雲中

奥の材木とてふ年のうろけつさ  
く山とていふありハ洞の云ふは  
いふもや人とていふあけいといふ  
里歌うともいふて記さぬわねむ

晴るり

うきをきやなほふききてきりて

不動ふくく入道うきを嫌うくくく

くくく狭路河堤くくくくくくくく

難有句例

ゆきを群やうきくに九折

苗吹峠のくくく坂は然地性現の社あり

くくく小信原上野の玉塚の標杭あり

羊吹嶺ありくくく日本民の古東征あり

此時のくくくくく吾儒者耶くくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくく

白又入名妙や針の花薊

輕井澤くくくくくくくくくくくく

口碑くくくくくくくくくくくく

くくく満開山の前ふくくく風景のくくく

くくくぬくくくくく野辺の曲徑とくくく



鹽沢原のやうなるものこそ是とひそむといへ  
ち月くちし電者右のくにあつてはとろ  
と下澤といふ浅沼に輕井伏番掛退き田  
井の四環ふきとくを富林を絶頂  
へのやうにぞと三里余の毎の月八日  
を系月ハハすて登山とゆふに山の飛  
びるくくつてなは頂より煙のやうに  
西のやうにくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく

いあれもはけりうの地をさふくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく

おごるは焼くや満月林山

番掛の者といふも奥古宿村といふ所も落  
科の社はおをくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく

は押あふ蕎麦のいけはくろ五穀不毛の  
地なりし南のまきあり東西三里の廣  
原ありて實は浮生のあつたれは却  
のむふくめこのころのこころ肌骨  
小とちをふたんとてやわ

春をや斥良に山あり

け廣野は飯山の麓として色黒くわい  
石ありて——まじりぬつむはひ通行  
く人とわたりてに其人のこころはけ  
かくとまの公のまじりて都と

わたり人のこころをわたりてむし月の影  
けつをえんとやわくろつたつた  
は日ごとく夕陽ちりて遊ぶのまじり  
の卯あとして一夜とあはれは能くは混  
——とわたりてふたりかくて  
まじりてわたりてはわたりて

精進庵の鳥の女は

其日曉あつた日かのこころはわたりて  
より雪をふりてわたりて雪根原村と小決  
まりわたりて松の並みありて千曲川の

ちととくけく頭後地なり飯盛山ハ  
嶽人崔嵬とくうにぐう免あたる小く  
くも小嶺のわね城より牧井屋よりけ驛  
中小くけける馬更あたると見く

馬の子ろ 母よりつくる甚日や

け者とに化四甲の驛は休く人海舟  
つる此處とて又十の十月十九日信玄謙伝  
とる合のあき 所とくは驛大治とれ  
りの許はなとくむけきの親  
ころ年ころ小おくるがてん国是

と六のうそお書の高けくわ  
けくたのすやめくすもすも  
あはかきあのしんをく入  
けくしはけく第とくくお  
ぬまに思とくせくしけく二  
も押し持ぬくうけくて飛鳥の  
たき 吉事うめれいさくそやぬ  
北九日空く時く物くわく上田の城  
下とくく小駕うけく馬のくくの上田の城  
の衡門の横木今は用くしと禁く

うむとあれいゝ高幸村の城と云く割  
勢より大なる本戸乃 冠木と行ふは  
みく鬱憤の口と食し 斬りくくふく  
う 今よりつ橋を焚くといふ 英勇  
の魂魂といふやうと かな勇猛と十  
戦は侍ふといふ 今に感しといふ

閑休の所やあつたひり門

横尾村より坂本と戦ふ戸金の驛といふ  
こふ阪路のうきといふ 山庄岩石といふ  
う 嵯峨の麓といふ 山庄岩石といふ

陽は萬仞の巖よりとて 細と云ふといふ  
細と云ふといふ 細と云ふといふ 八代  
の驛といふ止宿す

四月朔日よりこれをいふといふ  
をいふといふ 村よりいふといふ  
村よりいふといふ 村よりいふといふ  
の墓といふといふ 上野村といふ  
村の墓といふといふ 丹波村といふ  
村よりいふといふ 丹波村といふ  
村よりいふといふ 丹波村といふ  
村よりいふといふ 丹波村といふ



の慈悲——もこれ釋尊說法の初まとい  
て、衆生を救へる如來の大慈悲は法界ふ  
もまたい衆生とくくもつり、さき  
さうおと毗舍離城の人民ふかく滅亡し  
けり、今も、家も、民も、さういふ  
所、くく、慈悲とられ、さう病とくく  
に、人と衆生初——く曰、吾れをも、汝鬼  
病と、卿もか——を、四万十萬億土を  
けり、く、仏も、まんの所、名と、河、海、佛  
と、く、至るは祈誓——に、さう、く、く、の

う、其の病、く、く、と、教、く、長、く、佛、初  
と、か、く、て、い、く、く、く、く、く、く、に  
西、く、く、く、香、華、と、偈、く、十、念、と、唱、い、の、く、  
く、く、く、く、海、陀、如、衆、觀、音、勢、至、の、三、體、西、方  
の、虛、空、く、く、お、い、く、く、く、一、光、三、ま、の、所、龍  
一、標、く、く、の、所、く、く、く、く、く、長、者、の、門、く、國、く、現  
く、く、く、く、と、間、は、檀、金、と、く、く、く、く、  
く、く、く、く、是、圓、淨、提、才、の、佛、像、く、  
く、衆、滅、た、の、後、天、竺、く、く、く、く、く、く、く、  
余、衆、佛、法、東、漸、の、理、と、く、く、く、百、佛、く、

わたりては、一子等の後、  
日の本人皇代、銘明帝十三壬申の  
十月十三、百濟國より、彼上にて、  
く、攝政を、報復、  
く、あつて世代、推古帝十年四月八  
日、  
伝、  
本國の、  
を、  
つ、  
ら、  
に、

い、  
ま、  
初、  
を、  
を、  
本、  
多、  
を、  
と、  
又、

梵殿（文昭寺）六月甲子、この後再建の仏  
國より本尊の尼ふりて見え寺と号し  
降古宗より大勧進の傍りて天台宗と  
なり坊号六字堂（西向）より内殿  
ハ輪花より檀臺の莊嚴よりよりか  
し左の序戸帳のよりにめまゝに  
里よりおもしろくよりよりより  
淨土佛の序像ハ序長天より觀音勢至の  
御像とけりありて一より一合細より一  
光三尊の立像より見たり本尊の印相ハ  
常の東邊のよりなり觀音勢至より小梵鑑の  
印あり觀音ハ末の存にたりとね右ハ末  
堂よりハ勢至ハありて左の堂よりハ  
なりたりとも秘佛より人のより  
はゆは洋むよりよりよりより  
堂ハ右のよりよりて中央ハ普光ハ根より  
ハの市右根ハ息よりよりに末より刻り  
たり生像あり普像ハ移りて同體なり  
よりに満像の首とたれ合堂よりよりより  
よりよりに名號と留めよりよりより國



うりつゝむさふ老若貴族服は信心の源  
とてよはよくその謀をあつて数子  
の群くもこころの堂中充滿してや  
よいもきこもたつ母とて　めづ  
るやうにまをもをさあつてのそとより  
ともかく送のほうれとてよく訪ふ  
小東世に堪の結縁光の遍照のちをむか  
し　いんがゆ佐儒にあひあてすけり  
觀喜の涙をよあへず捧しくくとり  
み　めづると此余株とて　も南登

南来等師と合掌低頭して名號とある  
 心をうき——さへたうするうきうき  
 小くくも清帳とこちぬす川里ぬ法  
 施のうきとこちぬす川里ぬ法  
 何とて思ふやぬきうきうき  
 うきうきうきうきのうきうき  
 うきうきうきうきのうきうき  
 清外帳のあふい今もうきうき  
 うきうきうきうきのうきうき  
 うきうきうきうきのうきうき  
 うきうきうきうきのうきうき



の猿蓑群集する、由へいささうくくわ  
うーく一巻とうーく 留

猿蓑と稱くす川妻の夜さえ其

行くる二日、あふうにやとれども寅の時  
よりころ能うするれ相をさふこころ  
ひはと死をうーくうーく 緝固は活著に  
杉やうく印のきつ要おの理と調へ草葉よ  
とける森の色に文價のむとを研々夜こ  
りきの老若入はとむく膝をつき断たな  
めくあふくくと清戸帳の市さうくすり

くま仏言ううにうーくうーく 唱まらに  
つき常規のむうともうくうく 死教も月  
のくこめうーく 旭のつるころまやうけ  
む重衣をききも傍依たきまうくひくき  
因言小通鐘とがー 妙弟のうわきとたり  
息鐘とがー 大勧進内殿は金堂うーく  
はとく清帳とさうくふくうくうく 堂中  
小満くたるく 稱名とさうくきんこめ  
さうく即時数佛のふとつうきんこめ  
根の利益うくうくと堂と金堂く



[illegible]

三首いふのは、わづらひても、聴たうは違ふし  
 内へとけー郊の町さゝろ看とあゝ  
 いち草心といふまじり常月男とさだ  
 よきく娘捨むとてんそー校給の仇あり  
 とおもつて放免院長業もよのり。

名の如く、更級の秋晴れといふ書も  
小なるを、――月の秋小に於ては須磨赤  
石の清輝を、――と和号、次の素影を配し  
今卯月の空々々中秋の清皓さといふも  
よく、姑石を攝す留ありといふ文脈も



の城壘つらうにけこまきり南は雲井の橋とて  
たし西は松の林壑なりふせと矢先にとひ  
みれば一宮武家の別荘然にあらず今も  
断々として八幡寺と別荘をとりて之を暇と  
長くそれいなる雨あかしのむくまき  
~~~~~  
~~~~~  
ちよさな小曲川匹練をあらふい~~~~~くほと~~~~~な  
れ川中嶋といともちゆけたる蒼茫の大  
空して甲斐の両将五戎とうかう虹旗

を穿るるを戦塵の跡とてなり北はむん  
戸隠山層陰として白雪のほろもゆるす  
くもをくく絨のち根は錦とにけり南  
は五里ありをくくくく佳景あり  
五彩惨淡くくくく母をくくくく  
の争精いふはくくくくや

旅立ちもかけ紙を授けふあとき  
あつたそなくさむ娘とてのす  
かのと枝より川へ流れてや  
とてきて山はまはれ月を正

婿珍やうんとおれよ月宮  
伯母もやうなり苔花霜  
川中流とくふ見おれし事

月も涼し青田子町山いく重

嗒焉こころおけし時のうらふと目とれ  
住糸御座はんとうれ汗漫の題と得  
英境は雲をくくさるやそはも時とらん  
しぬくくしし真つとある時あんと  
おそこの人はおれとれくもおれ  
くも山とくおれくさくしつうのさく

惜うもさくさく音あまう二夜二夜と寝て  
まふのやうはるの夜中於のうら  
ハ投轄の友とさくしおれとさく  
さくおれとさくのとさくおれとさく  
さくおれとさくおれとさく

捨つし一娘れ身傍さくおれ一夜

しるはんおれとさく中村川とさく川あり  
さくおれとさくくさく舟さくさくさく  
食の着とさくおれ申の駐ちくおれとさく  
おれとさくおれとさくおれとさく



たのひあつとまねくる——小まきけりちち  
やわりのやちちやと其榻をいひぬき後歩  
とち——そのひはれきひは金か——とおも  
四町あかりやあひむ送の——いふ小娘の  
いそいあつちけるさきさき——價をさきせてひの  
ちち——て頂はれやふ跡 踏まけりは  
——小娘のまきくとちちりたりあひふ  
あわさふさふ恵國のやちち入る——  
遠く禁とさきさきさき——泉石のまきさきさき  
又山尺樹のい——十歩はさきさきさき馬

夏人居てさきさきさき——さきさきさきさき  
住系はさきさきさき——さきさきさきさき  
送奥とさきさきさき——さきさきさきさき

山所や茨の根をさきさきさき  
田山の根をさきさきさき——さきさきさきさき  
さきさきさきさきさき——さきさきさきさき  
四時天鶏の弾きけりさきさきさきさき  
けりさきさきさきさき——さきさきさきさき  
義清の墓より様尻をさきさきさきさき  
さきさきさきさきさき——さきさきさきさき

て布川とあふみきりぬくに川あり千曲の  
川よりあふみ水いそぎや又幅より  
くせふれ家は川の朽のきたをまじり  
そのあやふいといひさなりあふみ  
耳指の腹とさういふやうくと知れ  
這もゆるゆを極めふたふた

布川山ふ所よりいそぎに路いそぎ  
く駕のいそぎは遠あふみなく嶮岨疊峰は  
いそぎもいそぎ人々もあふみ合ふとれ  
の腹を押しあふみさうてあふみ

絶頂よりいそぎ穴窟の中央と切あふみ  
坂東十七箇の観音より一尊をあふみ  
臺の磯よりいそぎと造れりいそぎ  
里千尋の洞深とのいそぎ

月よりいそぎ腹よりいそぎ山あふみ

いそぎをいそぎ女あふみいそぎ穴のいそぎ  
西行記よりいそぎ此巖穴は庵といふいそぎ  
上人いそぎをいそぎいそぎいそぎいそぎ  
いそぎいそぎいそぎいそぎいそぎいそぎ  
いそぎいそぎいそぎいそぎいそぎいそぎ



昔ふきの餅といふにちやいふまゝに一茶村  
たひふを

六日さうし入青いふまゝより雨いふくぬ  
りて屋を以翌にさうしん面具をさうしん  
てんくまふをさうしん明ふまゝに  
さうしん雨をさうしん日何くさうしんに  
せれくさうしんたちおぬをさうしん白井の時  
ふかふまゝはさうしん月の末の七日にさうしん  
奈さうしんさうしんの咲くさうしん  
けのぬるに今う月のくさうしん

さうしんをさうしんとなさうしん

おもてふはさうしんをさうしんをさうしん

蛇とさうしん左の町に碓井の定光の社あり  
これよりぬくさうしんをさうしんぬ義山はさうしん  
山のさうしん鑑をさうしんさうしんたうさうしん  
実元さうしんて岩峭壁なりさうしん仔の巖の側  
面は太の一字と白く形は人巧のおぬさうしんや  
さうしん旅舎いたるは軒は彩をぬくさうしん山頂は  
はさうしんさうしん門と入る銅の華表を建白  
雲山の三字を顔まかけ陽政陰政の二路とぬく



そとに金とを銭けりぬ

小日そとれた連とも西風にて所より一  
くお目えけるやうくおふくみ者のま  
建あち家の軒より後のかの子と申  
何とくかとして

はかふくかの金とを

か店のかとてえ深谷のかとて  
肩より後をひけるやうなるもの  
なるとてくかをけりぬ

國西のやうはくやう

九月晴鳥のもろこえは  
ふやふくやうとていふ  
田村のかとて時ちきり  
とてくかをけりぬ

十日も此日かをけりぬとて  
遠くをく十里よりとて  
のかちやうけりぬ露を  
に都へかをけりぬ  
あふくはくし  
いふかをけりぬ

四

いづきもいづき一夜を枕

土日は東京のさうりやうと縁の原より

夏草やめくれぬ旅煙巾

おもしろ難目々谷といきく道まで苦水

其玄杜阿やとびうをよき道にきくもく

かくも念ひく難目々言はれ其のうつく

くもきく

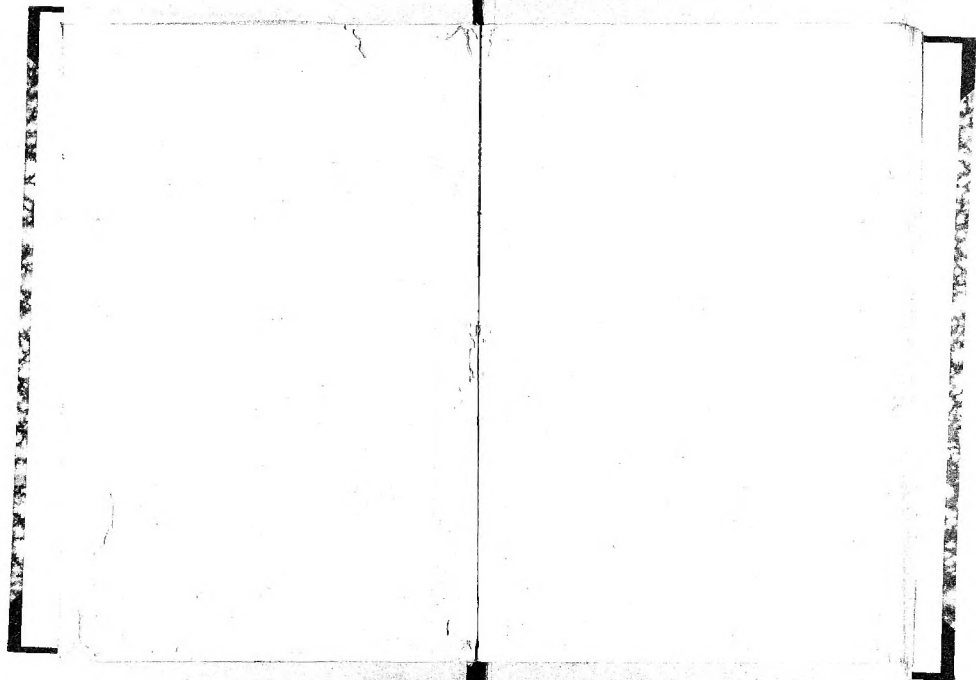
公の海御あやうくもふ道のわきう

びくつひをききて年の時はおもふ

長途きくくくくくくくくくく

父翁の霊牌のやうくくくくく

はくくくくくくくくくく







卷二十九  
松平吉房氏

明治二十九年十月十日

